幸若かわら版

幸若舞の里づくり会
事務局　橋本守行
電話090-7746-8689

第　３４　号
令和　４年　１月　１日

幸若舞に誇りを！

越前町教育長・出口俊一

新年あけましておめでとうございます。

年頭にあたり、越前町教育委員会を代表して、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

幸若舞の里づくり会の皆様におかれましては、令和４年の新春をつつがなくお健やかにお迎えのことと、心よりお喜び申し上げます。

また、旧年中は、本町教育行政に対しまして、格別のご支援とご協力を賜りましたこと、厚くお礼申し上げます。

日本中世を代表する幸若舞は、室町時代に当町で誕生しました。宝泉寺出身の桃井直詮は比叡山で学び、白山神の助力を得て幸若音曲を創始したと伝えられています。その出来映えの素晴らしさに、当時の天皇はいたく感心され、桐菊の御紋を下されたとの逸話は、郷土への誇りを高める契機となるでしょう。戦国時代には、多くの大名が幸若舞を愛好しました。

永禄三年（一五六〇）桶狭間の合戦に臨み、織田信長が幸若舞「敦盛」の一節を舞ったことは、特に有名です。幸若舞の名前を知らない方も、「下天の内をくらぶれば、夢幻の如くなり」のフレーズを耳にされたことがあると思います。

このように日本史を彩る素晴らしい芸能が当町で生まれたことを重視し、教育委員会では幸若舞に関する調査研究を進めて参りました。その成果は『朝日町誌』資料編１・『朝日町誌』通史編として結実しています。

昨年は、越前町織田文化歴史館の開館二十周年にあわせ、企画展覧会「織田信長が愛した幸若舞　～桃井雄三家所蔵文書を中心に～」を開催し、幸若舞と当町とのつながりについて、県内外へ広く発信することができたことを嬉しく思っています。

これもひとえに、幸若舞の里づくり会の皆様のご尽力とご協力によるものと心より感謝申し上げます。

この新しい年が、会員の皆様にとって希望に満ち溢れた最良の年となることを心からご祈念申し上げますとともに、本年も格段のお力添えを賜りますよう重ねてお願い申し上げまして、新年のご挨拶とさせて頂きます。

新年会参加者募集

恒例の新年会を下記の通り、実施しますので、参加希望者は藤川会員090-2127-4131または橋本会員090-7746-8689 まで、１月２２日までに申し込み下さい。今回は第５回歴史愛好会と兼ねて開催します。

日時１月２８日（金）１１時～　　会場　西田中・朝日楼　　会費　２，０００円／人

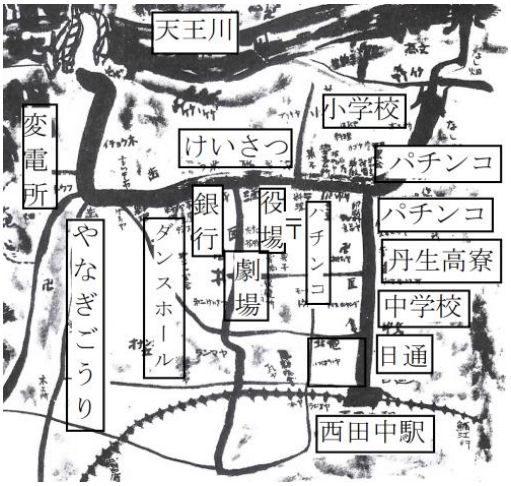
例会は隔月（偶数月）第2金曜日です

コロナにめげず！
現代・幸若舞けいこ怠らず

練習を見守る保護者のみなさん

本年もコロナ禍のため、現代幸若舞は十分な公演機会を得られませんでした。昨年３月の越前町芸能祭で「左内」を発表して以来、剣詩舞道会としての限定的な発表会は在りましたが、各種イベントなども中止が続きました。特に昨年夏の二カ月間は練習もままならないという厳しい状況でした。このような環境の中で、松田会員の指導の下に、練習を続けています。

松田会員も発表の場がないなかで、メンバーのモチベーションの維持に苦労しながら、現在は本年３月の芸能祭に「須磨の浦」を上演すべく、毎週土曜日の夜、頑張っております。



昭和２０年の西田中市街千秋氏資料

年末懇談会開催

恒例の年末懇談会が、千秋政子氏（朝日地区語り部の会会長）を話題提供者として、１１月２８日、１０名の参加者を得て、朝寿殿和室で開催されました。

千秋氏からは、戦前から戦後にかけて朝日地区で盛んであった杞柳栽培とこれを材料とした柳行李の盛衰について、説明がありました。当時の中心人物であった国広貞市氏は戦後県会議員に選ばれ、福井駅前で旅館を経営した。（のちにプラザホテル）

その他、気比庄梨や天王川の川遊びなどについて話が弾み、懐かしく楽しい時間でした。

福岡みやま市大頭流幸若舞視察参加者募集

昨年は中止となりましたが、本年は右記の要領で大頭流幸若舞の視察交流を実施しますので、奮ってご参加ください。希望者は月田会員090-2127-7856、または橋本会員090-7746-8689 まで、１月８日までに申し込み下さい。

日程概要　１月１９日（水）午前７時鯖江駅発
柳川川下り等、泊
１月２０日（木）大江天満宮幸若舞
奉納見学、博多泊
１月２１日（金）市内観光など
午後８時鯖江駅着

参加者負担金　約３万円／人 程度

幸若子孫　秋山純一氏
信長が愛した幸若舞　展示会　訪問

幸若一族で、八郎九郎家の流れを汲み、横浜市在住の秋山純一氏がみだし展示会の最終日にあたる一二月五日織田文化歴史館を訪れ、村上学芸員らから説明を受けました。

同氏は次のように語られた。

・秋山氏一族は、明治維新後も、東京には移らず、地元に残り、八代頼三は福井県庁職員となり、福井市に転居した。（同様に残った人達は「榎本」「蜂谷」などの姓に改姓した。

・純一氏五歳の時に、戦災にあい、伝来の文書等も喪失した。一時鯖江に居を移した。

・その後、父親勉氏が新聞社に職を得て、東京勤務となり、横浜に住むことになった。

・現在でも、秋山氏先祖の墓は、龍生寺にあり、ときどき墓参りに訪れている。また、親族は鯖江や福井に住んでいる。

前列左二人目純一氏、三番目子息直樹氏

歴史愛好会開催

第４回幸若歴史愛好会が去る１１月２６日に町図書館で開催されました。

青木豊昭氏から、「越前町の城館」をテーマとして講義を受けました。

越前町の城館には、大谷寺、栗屋城跡、尉ヶ峰城跡、三床山城跡、青野館跡、織田朝倉景綱館などがあり、近年も調査が進められている。

信長が愛した幸若舞　講演会と展示会

昨年秋、越前町織田文化歴史館開館二〇周年企画として、「信長が愛した幸若舞」をテーマに、展示会や講演会が同所で開催されました。

そのうち一〇月三一日（日）には第二回講演会が開催され、歴史作家の千葉亮さんと朝倉氏遺跡資料館元館長の青木豊昭氏が約三〇名の聴講者を前に講演しました。

それぞれの講演要旨一部は次の通りです。

千葉亮「信長時代の幸若に想像を巡らせてみよう」

・一向一揆により焼失した白山平泉寺の再興に尽力した顕海僧正らを主人公に小説「白の聖都」を執筆

・この小説の中では、戦国時代の幸若は芸能家として全国を行脚して諸国の社会経済事情などにも通じており、信長の「密偵」役と想定している。

・こうして、幸若大夫は一乗谷や平泉寺などで、有力者と交流し、信長の政治工作の一端を担っていたとする。

原元文氏と千葉亮氏

戦国時代の平泉寺は、岐阜・郡上藩（白鳥）とも交流があり、一向一揆により平泉寺を追われた僧侶たちをかくまったとされる「原左近衛門」の子孫の原元文氏が会場を訪れ、原家に伝わる逸話等を披露されました。

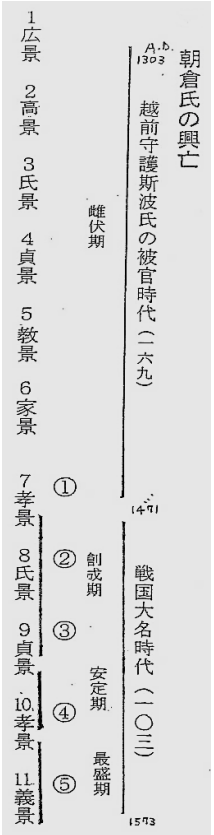
青木豊昭「朝倉氏の興亡と花開いた多彩な文化」

・戦国時代、朝倉氏の一乗谷は武力のみならず文化面でも、全国有数の栄華を誇り、京都の文化人たちとも交流があった。滅亡前に、徐々に家格があがっていったこともわかっている。

・このため、著名な文化人の招聘や城下町の文化芸能の振興に当たった。幸若芸能衆も逗留した。

・心月寺に桃井直詮のものとされる墓碑が残されている。（山口信嗣説）しかし、没年の年号などに疑問があり、直詮のものではない。

・しかし、記された法名に幸若一族共通の表記があり、幸若系譜につながる子孫の墓と考えられる。

・戦国時代には家の存続を図るため、兄弟の内一人は寺の僧侶として、万一の時に備える習わしがあった。

・また、越前田中庄を所領とした飛鳥井氏（蹴鞠や書の指導者）が朝倉氏の曲水の宴に招かれたとの記録も残る。